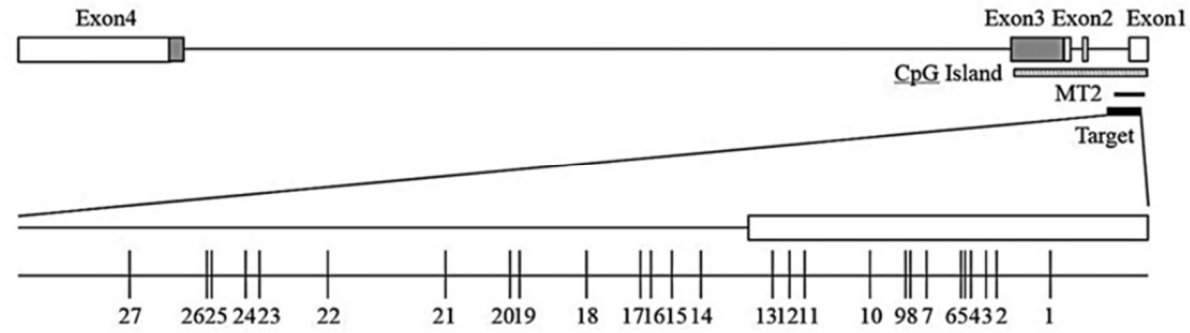
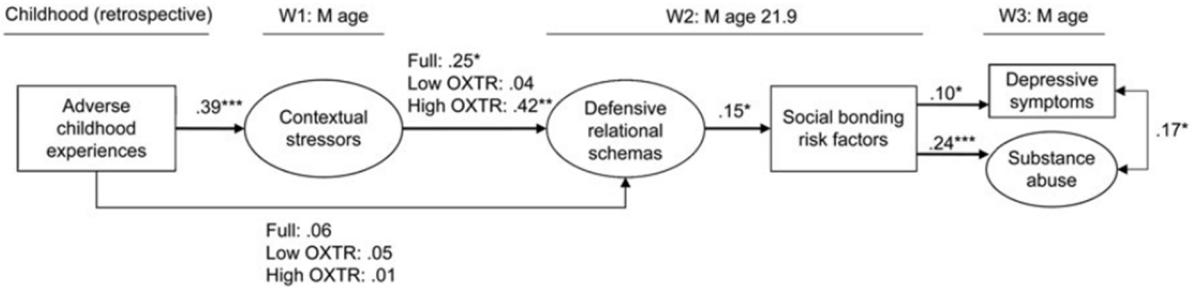
Development and Psychopathology 誌へ西谷正太特命助教の論文が掲載

幼少期逆境体験が薬物乱用、抑うつ症状に連鎖する経路に、オキシトシン受容体遺伝子メチル化の関連を解明

福井大学子どものこころの発達研究センターの西谷正太特命助教は、米国ジョージア大学のスティーブン・コーガン准教授、エモリー大学のアリーシャ・スミス准教授との共同研究により、貧困層が多い米国南部郊外に住むアフリカン・アメリカン男性（平均年齢 20 歳）約 500 名を対象に、青年期の薬物乱用、抑うつ症状に対し、幼少期逆境体験の影響がどのように連鎖をしているかを明らかにするために、社会的な行動属性に関する調査に加え、唾液 DNA のメチル化の影響を含めた包括的な縦断調査を行いました。

その結果、幼少期逆境体験が多いと、現在の青年期でのストレスが高いことや、オキシトシン受容体遺伝子のメチル化の影響を受け、次なる連鎖に繋がるという経路を明らかにしました。即ち、オキシトシン受容体遺伝子のメチル化が高い場合、他者に対して防衛・敵対的に振る舞う属性に関連し、他者との信頼関係を築き難く、これが薬物乱用、抑うつ症状のリスク要因となることが示唆されました。本研究成果は、2020 年 7 月 22 日に Development and Psychopathology 誌に掲載されました。





Kogan SM, Bae D, Cho J, Smith AK, **Nishitani S**, Pathways linking adverse environments to emerging adults' substance abuse and depressive symptoms: A prospective analysis of rural African American men, *Development and Psychopathology*, Jul 22;1-11. doi: 10.1017/S0954579420000632.